

書評・紹介

岡田 實『フランス人口思想の発展』

千倉書房，1984年4月，320ページ

本書は著者が過去30年間にわたる研究成果を集大成した文字通りの労作であり、のちに学位論文となったものである。本書の意義はわが国における人口思想史研究上の空白、特に18世紀フランスに関する部分の空白を埋めたことにある。その評価はすでに大淵寛教授（『中央大学広報』第722号）や故南亮三郎博士（『人口学研究』第8号）によってなされているので、本稿ではその構成を紹介したあと、両先生が言及されていない点に若干触れることにする。

本書は第1章人口思想史の方法、第2章18世紀フランスの人口事情、カンティヨン（伊藤久秋氏の影響によるのか、著者は「カンティロン」と呼んでいる）、ケネー、ミラボー、モオー、ネッケルの人口思想を扱った第3～7章、第8章19世紀初頭から20世紀30年代までのフランスの人口思想、第9章第2次戦後フランスの出生力変動の決定要因、ソーヴィの人口思想を扱った第10章、補論(1)マルサスの人口思想、モオーの正体を扱った補論(2)から成る。このうち第1章は全体の序論、第2章は第3～7章の背景説明、第9章は第10章の背景説明に当たる。書名は通史のような印象を与えるが、章立てからも明らかな通り、18世紀が中心となっており、それ以前については（増田抱村氏がすでに紹介されているためか）第3章の初めで若干触れられているだけである。また、人口動向、人口思想、人口政策の上で大きな変化があった19世紀から戦間期までの時期が第8章に詰め込まれている。

第8章の初めでフランスにおけるマルサス主義とそれに対する批判が若干論じられているが、著者は本書の随所でマルサスの人口思想に言及し、さらにそれを補論で扱っているくらいなのだから、マルサス主義の直接的影響を扱った章を別に設けても良かったのではないかと思われる。あるいは、Y. Charbit氏の『マルサス主義から人口賛美主義へ』が1980年に出版されたので遠慮されたのであろうか。

第10章で扱われたソーヴィはフランスに限らず、また現代に限らず人口思想家としても卓越した人物なので、その思想をわが国に紹介した功績は大きい。特に、著者達による『人口の一般理論』の訳書が出版される前になされたことに敬意を表したい。ただし、ソーヴィの思想は第9章にも出てくるので、二つの章を統合した方が良かったのではないかと思われる。

著者は第1章で「人口思想史」の研究は思想家の基本的ヴィジョンや社会哲学をも対象に含めるべきだと述べている。そうだとすれば、日本人の読者を対象にした本書の場合、大部分のフランス思想家の世界観や価値観の基礎を成してきたカトリシズム（人によってはその他の宗教）の人口思想に対する影響を第3章以下の各章で明示的に扱うか、別に1章を設けるかする必要があったのではないであろうか。

以上では無いものねだりばかりしたが、本書が人口研究者にとってはもちろんのこと、経済思想史、社会思想史、社会政策といった分野の研究者にとっても一読以上の価値をもつものであることを強調したい。今後、著者が17世紀以前について1冊、19世紀以降についてもう1冊の書物をまとめられ、『フランス人口思想史大系』を完結されることを期待したい。実際、後者の研究については著者自身が今後の課題とされているので、比較的早く結実するものと確信している。最後に、最近出た第2刷では誤植が減ったことを付け加えておきたい。

（小島 宏）